

## 第 11 回例会報告要旨

Y Brasluniau o'r Papurau, y DegfedCyfarfod,

Mehefin yr deuddegfed, 2010

Keio University, Tokyo, Siapan

第 1 部： 個別報告 Rhan 1: Papur

ウェールズの企業家：デヴィッド・デイヴィス

帝塚山大学経済学部

梶本 元信

**Welsh entrepreneur; David Davies of Llandinam**

Motonobu Kajimoto

Generally speaking, and clearly shown in G. Evans' book, *Welsh Nation Builders* (Gomer Press, 1988), businessmen who have contributed to the industrialization of Wales are not highly regarded in its history. Amongst the sixty-five eminent Welsh who contributed to the nation building, there were no businessmen. One potential reason might relate to the fact that most business leaders were from England. For Welsh nationalists, English businessmen were nothing but enemies because they not only destroyed old traditional industries but also natural Welsh beauty, its culture and language. In order to understand present Wales objectively, we ought not to neglect businessmen during the period of industrialization as they played an indispensable part in creating new industries and cultures. This paper attempts to explain one aspect of industrialization by taking up the Welsh entrepreneur David Davies of Llandinam.

ウェールズ史研究の中で、経済史や企業家への関心はあまり高くないように思われる。例えば、G. Evans の *Welsh Nation Builders* (Gomer Press, 1988 年)にはウェールズのために貢献した著名人が 65 人上げられているが、その中に経済発展に貢献した人物は皆無であった。その理由として、企業家の多くがイングランド出身であったことに加えて、彼らを中心に展開された経済発展が、旧産業の破壊ばかりでなく、風光明媚な自然環境や、なによりもウェールズ固有の言語・文化の破壊を引き起こしたことによっていると思われる。しかし、現代のウェールズを客観的に理解するには彼らの残した業績を無視することはできないし、彼らが行ったのは決して破壊活動ばかりではなかった点にも注目すべきである。確かに彼らは、旧産業は言うに及ばず、緑豊かな自然環境や固有の文化の破壊者であったかも知れないが、他方で新産業や新文化の創造者でもあった。ここでは、ウェールズ出身で経済発展に貢献したデヴィッド・デイヴィスの企業活動の紹介を通じてウェールズ工業化の一こまを考察する。

デヴィッド・デイヴィスは 1818 年 11 月 20 日にモンゴメリーシャーのストラ

ンディナム(Llandinam)で、10人兄弟の長男として生まれた。家業は農業であったが、貧乏人の子沢山で、生活は決して楽ではなかったようである。デイヴィスは11歳になるまで村の教会の中にある学校に通ったが、少年時代から木挽の仕事を行うことによって、家計を助けていた。何よりも両親、とりわけ熱心なメソジストとしての母親からの宗教的訓育がデイヴィスの生涯にわたる行動規範となった。彼の伝記作家アイヴォー・トマスがそのタイトルを『トップ・ソーヤー』(Top Sawyer)と題しているように、デイヴィスは、少年の頃から病弱な父親を助けて、木挽きとして、あるいは農民として、一家の大黒柱として働かなければならなかった。そしてそのことが不屈の精神力を培うとともに、経営者の立場に立った時にも、彼の下で働く労働者への心遣いを忘れることなく、結果的に労働者からの信頼を勝ち取る上で役立ったのである。

デイヴィスの活動は単に企業家としての側面だけにとどまらなかった。彼は熱心なカルヴァン派のメソジストとして、数多くの教会の設立に貢献したし、自由党の国会議員としても、またウェールズ大学(University College of Wales)の設立への寄与を通じて、教育面でも地元の人々のために貢献した。しかし彼の活動の中心はビジネスであったことは疑いない。そして企業家としてのデイヴィスの活動には、主に次の3つの局面が見られた。

その第1局面は、鉄道コントラクターとしての活動である。鉄道を建設する場合、計画の立案、費用の確定を行うのが主任技師であるが、実際に建設工事を担当したのがコントラクターであった。彼らは数百人もの労働者を雇用することによって、工事を請け負った。デイヴィスは彼のパートナーで、ライバルでもあったトマス・サヴィンとともに、ウェールズの多くの鉄道建設で活躍した。彼らが建設した鉄道の多くは1864年にカンブリアン鉄道として統合された。しかしコントラクターは大きな危険を伴う困難な仕事であり、デイヴィスとサヴィンの命運は対照的であった。前者は成功し、後者は破産した。デイヴィスは大変な努力家で、着実に仕事をこなしていくタイプの人物であったのに対して、サヴィンは野心家であったが行動に思慮を欠くことが多かった。デイヴィスの成功の秘訣は、労働者との良好な関係を維持することができたことに加えて、危険管理に成功したことにある。中部ウェールズの農民出身というデイヴィスの出自が、労働者の信頼を勝ち取る上で有利に作用した。鉄道会社の取締役は鉄道建設に従事した労働者(ナヴィ)にとって雲の上の存在であったが、コントラクターという職業は労働者の親方に近かった。しかもデイヴィスは時間があれば工事現場に現れ、労働者と接した。彼はごく自然に労働者の中に溶けこむことができた。仕事上不可避の危険管理を怠らなかったこともデイヴィスの成功にとって重要な要素であった。

デイヴィスの企業家活動の第2局面はロンザの炭鉱企業家としての活動であった。1870年代から第1次世界大戦にかけて南ウェールズ炭鉱業は黄金時代を迎えた。しかもデイヴィスが炭鉱業を開始したアッパー・ロンザはイギリ

スでも屈指の良質炭の産出地域であった。そこで採掘された石炭はスチーム炭と呼ばれ、船舶用、とりわけ世界中の海軍で軍艦用燃料として重用された。1905年の日本海海戦で、東郷平八郎率いる帝国海軍がロシアのバルチック艦隊を撃破したとき、日本の軍艦で使われていたのがロンザのスチーム炭であった。デイヴィスがロンザの炭鉱開発に乗り出すのは、カンブリアン鉄道会社が設立されたのと同じ年の1864年で、仲間の企業家たちとともに石炭の試掘を開始するのである。デイヴィスたちが開発した炭鉱はオーシャン炭鉱とよばれ、彼が亡くなる1890年には7つの炭坑を所有し、約5,600人を雇用し、その産炭量は173万トンに達するイギリスでも屈指の大炭鉱に成長していた。しかし、他方で、今や百万長者となったデイヴィスと、彼の炭坑であくせく働く労働者との間には大きな溝ができ、デイヴィス自身の意図とは裏腹に、その溝はますます広く深くなっていったことも事実ある。

さて、デイヴィスが最後に情熱を傾けた企業活動は、バリー・ドックとロンザの炭鉱地帯からバリーへ通じる鉄道の建設であった。その活動の中心となったのが、**The Barry Dock and Railway Co.**(=BDR、1891年に**The Barry Railway Co.**と改名)であった。同社が設立されたのは1884年で、ドックと鉄道が営業を始めるのは1889年であった。BDR設立の動機はカーディフ、およびその郊外のペナースにおけるドック施設や既存のタフ・ヴェール鉄道が、後背地の産業、とりわけ炭鉱業の急速な発展と船舶の大型化に十分対処できなくなってきたことによっていたに加えて、大規模なドック建設を可能にするほど、内陸炭鉱業者の間に資本が蓄積されていたことも、大きな要因であった。BDR建設の主導者はロンザやアバーデア溪谷の炭鉱業者であったが、とりわけデイヴィスのリーダーシップと資力の役割が決定的に重要であった。

大局的に見て、BDRは、従来からの輸送の独占を打破し、炭鉱業者にとって輸送費用の低下をもたらしたばかりでなく、大規模なドック施設の開設により、海上輸送のボトルネックも解消する役割を果たした。また、鉄道間の競争は他方では路線拡張競争となって現れた、従来は未開発に止まっていたオグモア溪谷をはじめとする西部地方でもますます炭鉱開発は進められたのである。このように、新ドックの開設は、長期的に見ると、南ウェールズの経済発展に大きく寄与したのである。しかもデイヴィス個人にとっても、バリー・ドックは彼の長年にわたる企業活動の集大成といえるものであった。

以上、デヴィッド・デイヴィスの企業活動を中心に考察してきたが、彼はウェールズ固有の言語・文化をどのように見ていたであろうか。企業家としてデイヴィスは、鉄道建設や炭鉱開発によってウェールズ経済が繁栄し、地元の人々が豊かになることを夢見ていたことは疑いない。鉄道がアベリストゥイスに到達した翌年、その町で行われたナショナル・アイステズヴォッズでの演説の中で、彼は次のように述べている。「私は古いウェールズ語の最大の賞賛者であり、それを罵る者には共感できません。しかしなお、世間を広く見てきますと、お

金を稼ぐための最善の言葉は英語であることがわかりました。私は全ての同郷の人たちに英語を完全にマスターするようにアドバイスいたします。もしあなたが灰色のパンで満足するならば、今のままでいたらよいでしょう。しかしもしあなたが白いパンを食べ、贅沢な生活を享受したいならば、十分英語を学ばなければなりません……」。デイヴィス自身は、もちろんウェールズ語を話すことができたが、通常はウェールズ訛りの英語を使っていた。